

あゆみ通信

VOL. 199

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

門徒会との合同 研修会報告



あゆみの会では、2013年以来、第2組門徒会員研修大会とあゆ

みの会例会の合同研修会を開催しています。

今年も10月2日(木) 午後1時30分から天王寺区の光照寺(墨林浩住職)をお借りして、13名が参加して、開催されました。

開会は、真宗宗歌を、講題にちなみ3番まで斉唱。第2組墨林浩組長と、門徒会から吉田雄彦副会長(法山寺)からご挨拶をいただきました。

当日の講師は乙部大信先生(3組恩楽寺住職)で、「念仏修行～世のなりわいにいそしまん～」という講題でお話しいただきました。

冒頭、先生は幼少から家族ぐるみでそろばんを教えてもらった熱心な総代さんのご家族の話をされ、発病から半身不随になり、介護の生活を通して、困難を乗り越えて、お母さんを中心にご家族が結束して看病を尽くされてお父さんが往生された姿をとおして「一切衆生悉有仏性」と話されました。

そして先生は、講題の「修行」について、「修」とは象形文字を表していて、川で髪を洗い流す姿で、汚れを落として清浄な身にかえる。すなわち、本願の願いのところに帰りなさい、元の自分に帰りなさいと。

お釈迦さまは仏法聴聞することを修行と言われ、それを命日(皆で集まり話を聞く日)にやりなさいと。また、何故修行をするのかについて、煩惱の身であるからと。

休憩後は、先生はお釈迦さまが出家をされて修行をされ、発見された「阿弥陀」や、釈迦とパセナディ王との物語について触れられ

ました。

また、カウンセラーをされている先生が対応された相談者とのやりとりや、清澤満之師の「天命に安んじて、人事をつくす」、仏さんの心に身を委ねて、ザルを水に浸けるよう(蓮如さんの言葉)に、人事を尽くせと、自分の生業を誠心誠意やっていこうと言われたと話されました。

最後に、真宗宗歌の1番から3番の歌詞を辿りながら、仏さんの徳をいただきながら共に生きましようと言うことがうたわれていると話されました。

閉会は、恩徳讃斉唱のあと、あゆみの会会長の細川克彦氏から挨拶があり、終了しました。

今年最後の聞法会 が開催されました

10月16日(木) 午後2時から、阿倍野区の

西教寺(松本隆信住職)で、組内の住職や坊主、そして門



徒や推進員等27名が参加して、今年最後の聞法会が開催されました。

最初に墨林浩組長(光照寺)から開会挨拶。そして、松本住職の調声で「正信偈」「念仏・和讃」「回向」を全員で勤めました。

講師は先月の引き続いて廣瀬俊先生(17組 法観寺住職)が、『正信偈』の「本師原空明仏教～唯可信斯高僧説」までを話していただきました。まず先生は、お経の意識を説明された後、何故源空(法然)上人が仏教を顕かにされたのかについて、金子大榮師は①「機を知る」～誰を救うのか、善悪凡夫人、つまり、あらゆる人々であると。②「所を知る」～何処で救うのか、興片州、お念仏の教えをここ日本に伝えた。③「時に相応している」～どんな時代に救うのか、弘悪世、煩惱に満ちた時

第2組報恩講に ご参集ください

宗祖親鸞聖人が、弘長2(1262)年11月28日、90歳でお浄土にお還りになりました。親鸞聖人をはじめ、お念仏の教えに生きられた先達に思いをいたし、その恩徳に感謝し報いる法要が報恩講です。(東本願寺「報恩講」)

第2組では、長らく共同教化事業として、合同報恩講を開催し、住職や坊主、そして門徒が共にお勤めしています。

今年も、下記の通り開催されます。ぜひ、ご参加ください。

記

日時 **11月21日(金) 16:00**
会場 即應寺(阿倍野区阪南町)
内容 お勤め、法話、お齋、同朋総会
講師 尊(はなふさ) 慶典先生(浄土真宗本願寺派壽光寺)
参加費 2,000円(お斎料)
申込み お手次のご寺院へ

物忌み

世間で、「門徒、物知らず」と言う言葉を聞いたことはありませんか。正しくは「門徒、物忌み知らず」というのだと、住職の法話で知りました。

「物忌み」とは、迷信のことですね。例えば、49日が3か月にまたかると、よくないことが起こるとか、友引に葬儀をすると引かれるとか。縁起をかついで、結婚式は仏滅はしないとか。何の科学的な根拠や合理的な説明もないのに、まことしやかに言われます。

そう言えば、男は25歳、42歳、61歳を厄年と言って、神社でお払いしてお札を受けたことがあります。

住職は、きつぱりと、この世で人間に恩恵を与えたり、あるいはお災いをあたえたり、私たちを支配する仏さまや神様居られませんとお釈迦さまがおっしゃっています。お釈迦さまが訪されたのは縁起の法。この世の出来事は因縁果の道理の上で成り立っていると。「私たちの都合を超えた因縁所掌の世界です」と。

でも、80余歳になっても、ふと気を引かれる時があり、気付かされることがしばしばあります。反省しきりです。(本)

代にと、機と所と時、このことに相応していなかったら、仏教を頭かにかしたとはいえない。今ここで私が救われて行くことが成立しないと、仏教の教えが素晴らしいお教えとは言えない。だから、法然上人は、今この日本で、選択本願と言う教えを、この時代に説いてくださったと言うのは、仏教を頭かにかされたと言えるのですと、話されました。ここで大切だと思うのは、「善悪凡夫人」と言えるのではと。ええ人、悪い人は私の都合で決めている。法然上人は、この私も誰かにとっては善人かも知れないけれども、誰かにとつたら悪人かも知れない。つまり、善悪凡夫人は、すべての人々と言う意味だと。そして「生死」について、私たちはあらゆる物事をあかんこととええことの二つに分けて考えることを仏教では生死と言うと。その中心は、いつも自分の思いである。我々が苦しいと思っている根本は、物事を二つに分けること。その二つに分けて比べる「迷いの世界から出ませんか」と言うのが、この部分なのです。そのことをここでは。本願を疑っているからと言われますと、話されました。

「正信偈」最後の結びの4句。「弘經大士宗師等 拯濟無辺極蜀惡 道俗時衆共同心 唯可信斯高僧說」は、お経を広められた七高僧はあらゆる人々を救う。その七高僧の教えを聞きなさい。で、依釈段の結びが終わります。七高僧は何を説いているかと言うと、お経を説かれている。つまり、お経に戻りなさいと言われている。と言うことは、もう一度頭に戻ってお経を聞きなさいと。お経の教えに照らされなさいと言うことを、形作っておられるのではないかとすると話されました。

休憩後は、先生は法然上人のことを話するにあたっては、親鸞聖人のご生涯を見ていくことが大切だと。どうして親鸞聖人は法然上人の何にと思われて、上人の下へ行かれたのか。

先生は、TVの3年B組金八先生のセリフで知った茨木のり子さんの詩「ぎらりと光るダイヤの日」が紹介された「本当に生きると言

うこと」に注目されたと。そして、親鸞聖人が比叡山での修行で「本当に生きる」ということが求めているも見えてこない。聖人は、本当の仏教を求めて19歳の時に磯長の聖徳太子廟で、29歳で六角堂に参籠されて夢告を受けられ、吉水で法然上人と出会われて、「善き人にも悪き人にも、同じように生死出べきみちをば、ただ一筋に仰せ候いし」（「恵信尼消息」）。しあわせになるために、生死出べき道を誰もが生まれて来たのだと。

念仏者で作家の高史明さんのご長男の遺作詩集や、さだまさしさんの歌詞「いのちの理由」（法然上人800年大遠忌、法然共生イメージソング）、そして障害を持ちながら画家の星野富弘さんの「愛、深き淵より」等を紹介されながら、親鸞聖人が法然上人に出会われて「善悪凡夫人」「生死の世界を出る」と言うことを『正信偈』に納められたのではと思うと締めくくられました。

閉会は恩徳讃を斉唱し、今年の聞法会を終わりました。

如是我聞 乙部大信先生法話聞書 佛足寺 細川克彦

乙部先生は「念仏修行～世のな



りわいにいそまん～という講題で、お話しくださしました。

始めに修行と言うと学問の研鑽と身体的な厳しい行を思い浮かべるかも知れないが、我々にとって「念仏修行」と言う言葉が意味することは、仏を念じて聞法することであると云われました。

私たちが在家のものは、業縁から離れることの出来ない業縛の身であり、損か得か、また、止むを得ない争いの中で生きていかなければならない。そんな者のために法を説いてくださいと、コーサラ国のパセナリ王が釈尊に訴えていたことが王の死後に説かれた『法華経』にあると。

修行の「修」と言う字の元の意味は髪を洗うと言う意味であって、修行とは、本来の清浄な身に帰る

大推協通信

公開講座のご案内

大推協（大阪教区同朋の会推進員連絡協議会・会長細川克彦）では、親鸞聖人の教えを、自身の依り処とすべく聞法活動に取り組んでおり、その一つとして公開講座を下記の通り開催しています。皆さんのご参加をお待ちしています。

記。

日時 **2025年12月4日(木)**
午後2時～4時(開場午後1時30分)
会場 難波別院 同朋会館講堂
(地下鉄本町駅⑬番出口を南へ)
講題 なぜ、南無阿彌陀仏なのか
講師 安城 覚正先生
(大阪真宗学院指導・第4組恩敬寺)
参加費 無料
問合先 大阪教務所
(06-6251-4720)

ことであり、命日(元々は法座の開かれる日を意味していた。それはお彼岸やお盆や報恩講など)に聞法することであると。

先生のお寺のご門徒の方で、80代後半で最近亡くなられた方が7年前に脳卒中で倒れ、普段はベッドで、月参りには手で這って部屋の入り口まで出てこられていた方がおられた。そのお世話を奥様が昼夜逆転する中でしておられたが、ご主人が亡くなられる2年前、とうとう月参りに来られた先生のお母様に「もうこんな生活は嫌！」と吐露されたことがあった。その時お母様は奥様の手を取って、「アンタはようやってはる！アンタはようやってはる！」と、一緒に泣かれたと。

その後、奥様に何があったのか、共に戦後を苦労してきた夫を死ぬまでお世話をすると、息子や娘にきっぱりと告げられたと。息子や娘もお母様の気持ちに触れ、介護を手伝うようになったと。人は真実に触れると言うことがあり、それは阿彌陀さまが寄り添って下さっているということではないかと。

先生は他の例もあげられながら、阿彌陀さまの本願が働いてくださっている(荷負群生)身である、凡夫が生きていける道を教えてくださいました。